

ルカによる福音書23章1-25節 「罪、そして、それを赦す祈り」①

**1A 異邦人に引き渡された主 1-43**

1B 総督ピラトの悪 1-25

1C ヘロデへのたらい回し 1-12

2C バラバとの引き換え 13-25

2B ローマ兵の虐げ 26

3B 勘違いの悲しみ 27-31

4B 不法な者としての死 32-43

1C 赦す祈り 32-38

2C 悔い改める犯罪人 39-43

**2A 正しいかった主 44-56**

1B 百人隊長の証言 44-49

2B 議員ヨセフの願い出 50-56

**本文**

ルカによる福音書 23 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ルカ 22 章まで来ました。今日は、午前と午後で、23 章を分けて一節ずつ読んでいきたいと思えます。午前は、1 節から 23 節までを読みます。私たちは、イエス様が十字架刑に処せられる場面を見ていきますが、神の深いみ旨を見ていきます。ペテロが、五旬節に聖霊が降った後で、ユダヤ人たちにこのように話しました。「使徒 2:23 神が定めた計画と神の予知によって引き渡されたこのイエスを、あなたがたは律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺したのです。」

これから、私たちはイエス様が十字架につけられていく姿を見ていきますが、そこで、人々の不法と悪を見ていきます。そこには、あらん限りの不当な仕打ち、理不尽な要求、不条理な決定を見ます。私たちが日ごろ、目にしている不条理、理不尽、不当を思い起こさせるようなものです。しかし、それら一つ一つが、実は神は予め定めた計画の中にあつて、予め知っておられたということです。神の主権がなければ、これらのことは起こらなかったということです。「人間の最悪の状況の時に、それでも主がそれを知っておられ、知っておられるだけでなく、そこに善をもたらされる。」ということです。今日は、非常に重く、深く、そして慰めを受ける神のお働きを見ることとなります。

**1A 異邦人に引き渡された主 1-43**

1B 総督ピラトの悪 1-25

1C ヘロデへのたらい回し 1-12

1 集まっていた彼ら全員は立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。

私たちは 22 章の最後で、イエス様がユダヤ議会(サンヘドリン)によって死刑の宣告を受けた後の出来事を読みました。夜中に大祭司カヤパの家でイエスが死刑だとしたのですが、正式な議会、サンヘドリンは日中に行わなければならないため、夜が明けてから行いました(22 章 66 節)。イエス様を死刑に定め、本来ならユダヤ人は石投げによって殺すことを律法によって定められていましたが、当時、ローマ当局からユダヤ人は死刑を執行する権利を剥奪されていました。

ここから私たちは、とても複雑な、そして非常に人間臭い政治の世界に入ります。イエス様が弟子たちに対して、こう語られていたことを思い出してください。「18:31-33 ご覧なさい。わたしたちはエルサレムに上って行きます。人の子について、預言者たちを通して書き記されているすべてのことが実現するのです。人の子は異邦人に引き渡され、彼らに嘲られ、辱められ、唾をかけられます。彼らは人の子をむちで打ってから殺します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」異邦人に引き渡されて、嘲られ、辱められ、またむち打たれてから、殺されるとのことです。今、読んだところは異邦人であるローマに引き渡されたところでもあります。

ピラトは、ローマのユダヤ属州を、紀元後 26 年から 36 年まで治めていた総督でした。元々、この地域はヘロデ家の統治下にありました。ヘロデ大王はイドマヤ人であり、エドム人の末裔でありましたが、イドマヤ人がかつて強制的にユダヤ教に改宗させられており、改宗したユダヤ教徒でした。ヘロデは、ローマの軍事行動を積極的に援助することにより、ローマ皇帝の信用を勝ち得て、ローマから「ユダヤ人の王」という称号を受け取りました。しかしヘロデ大王は紀元前 4 年に死んで、息子四人に領土が分割されて分割統治をしました。

ユダヤ地方を息子の一人ヘロデ・アルケラオ(マタイ 2:22)が支配していましたが、度重なる失政でローマ皇帝によって紀元 6 年に解任させられました。そこで、ローマはサマリヤとユダヤ、さらにその南のイドマヤの地方を「ユダヤ属州」として、直轄で支配しました。そしてその州都はカイサリアでした。ユダヤ教の改宗者であり、エルサレムに神殿を建てたヘロデ大王をしても、純粋に神を礼拝しようとするユダヤ人からは好意を勝ち得ることはできませんでした。ましてや、皇帝崇拜を中心にする異教文化を持ち合わせるローマが直接支配となると、ユダヤ人との軋轢と摩擦はかなりひどくなっていきました。ユダヤ人熱心党による抵抗運動が度々、起こっていました。

その中で、ポンティオ・ピラトは、ユダヤ人に対しては冷血な支配者でした。ユダヤ人の宗教的心情を全く無視し、冷血な処置を取っていました。皇帝の像をエルサレムに持ち込んでローマ軍を行進させることで、ユダヤ人の反感を買いました。それで、彼は群衆に兵士を紛れ込ませて、騒ぎ立てる者たちを見つけ出し、殺させようとしていました。ところがユダヤ人は、「律法に背くよりは、剣で殺されたほうがましである。」として首を差し出したので、これでは騒動が発展して反乱になるかもしれないと案じて、ようやく皇帝の像を外したという逸話があります。また、神殿の金庫から財産を没収して導水橋の建設にあてがって、ユダヤ人たちが怒り狂ったのですが、それで鎮圧するためにローマ兵に大衆と同じ格好をさせて、棍棒で騒動を起こしている者たちを打ち殺していったとい

う話もあります。13 章には、「ピラトがガリラヤ人たちの血を、ガリラヤ人たちが献げるいけにえに混ぜた(1 節)」とあり、その冷血さを垣間見ます。ところが不思議なことに、このピラトをしてさえ、ユダヤ人議員たちの圧力に屈していく姿を見ます。

2 そしてイエスを訴え始めて、こう言った。「この者はわが民を惑わし、カエサルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることが分かりました。」

ユダヤ人指導者たちは、自分たちがイエスを死刑にするという根拠は、この方が神の子キリストであると自ら証言したからだ、ということで死刑判決を下しました。しかし、それは当たり前ですが宗教裁判では通用しても、ローマの法律では全く通用しません。例えば、私たちがエホバの証人が異端であるという判定をしても、日本の法律で罰せられることは一切ないのと同じです。それで、ローマの法律に抵触する告訴をしなければいけません。一つは国民を惑わす罪です。民衆を扇動し、暴動を起こす罪です。もう一つは、納税拒否を指導した罪です。さらに、皇帝反逆罪です。カエサルのみが王であるのに、自分を王としている罪です。

3 そこでピラトはイエスに尋ねた。「あなたはユダヤ人の王なのか。」イエスは答えられた。「あなたがそう言っています。」

ピラトは、話を聞いていると、初めの二つには全く根拠がないことは明らかでした。ただ少し、「自分は王キリスト」という訴えだけが気になりました。けれども、それでも、彼の目の前にいるのは、激しく殴られ顔にあざができて、変形もしているかもしれない、みすぼらしいユダヤ人の男でした。それで、「おまえが、ユダヤ人の王なのか。」とかなり皮肉を込めて尋ねたのだと思います。そしてイエス様の「あなたがそう言っています」というのは、「あなたがそう言っているままですね」のような意味合いで、暗黙に了解している返答です。

4 ピラトは祭司長たちや群衆に、「この人には、訴える理由が何も見つからない」と言った。5 しかし彼らは、「この者は、ガリラヤから始めてここまで、ユダヤ全土で教えながら民衆を扇動しているのです」と言い張った。

ピラトは、これから三度に渡って「この人には罪は見つからない。」と宣言しています。ピラトは、ユダヤ人には冷血な人間であっても、裁判官としての自負はあります。ローマ法に照らして、罪でない者は罪ではないのです。どんなに酷い医者でも、明らかに癌ではないと診断したら、癌ではないと言っているのと同じで、裁判官にとってあまりにも明らかだったのです。ところが議員たちは、民衆を扇動していると「言い張った」とあります。ただ強く言い張っただけなのに通用してしまったのです。社会の中、生活の中にも、このような悪がありませんか？ 正しくないことも、言い張って通用させてしまうという悪です。

6 それを聞いたピラトは、この人はガリラヤ人かと尋ね、7 ヘロデの支配下にあると分かったら、イエスをヘロデのところへ送った。ヘロデもそのころ、エルサレムにいたのである。

ピラトはここで、裁判官として正しいか間違っているかの判断ではなく、政治的に動いています。ガリラヤ人であるということは、そこはヘロデ・アンティパスの支配下であるので、ちょうど良いと思いました。いわば、彼に顔を立てることができる、ということです。彼は、イエス様に対する判決を自分にとって都合がよいと思ったのです。

ローマ総督は、ユダヤ人の三大祭りの時、すなわち過越の祭り、五旬節、そして仮庵の祭りの時には、エルサレムに行きます。その時にユダヤ人たちが祭りの中で、民族的意識が高揚するからです。特に神殿の敷地で騒動が起こらないように、それに隣接するアントニオ要塞からローマ兵たちは見下ろす形で監視していました。それでピラトはエルサレムにいますが、ヘロデはユダヤ教の改宗者ですから、エルサレムにいます。ヘロデには宮殿があり、イエス様を総督官邸からヘロデ宮殿に連れて行ったのです。

そしてこのヘロデ・アンティパスであります。彼もまた、お世辞にも褒めることのできる人間ではありません。先ほど話した大王の死後、息子四人に領土を四分割したうち、ガリラヤとヨルダン東岸にあるペレヤを統治する一人となりました。ガリラヤ湖畔にはローマ皇帝にちなんで「ティベリア」の町を造り、そこに住んでいましたが、ユダヤ人は、そこはもともと墓地であったからということで、汚れた土地としてそこに住みませんでした。

当時、ナバテア王国というものがいましたが、その王でアレタス四世がいました。その娘が、ヘロデ・アンティパスの妻でした。ところが、ヘロデは自分の兄弟、ヘロデ・ピリポの妻であるヘロディアを自分の妻にするという悪を行ないました。バプテスマのヨハネが、「あなたが兄弟の妻を自分のものとしていることは不法です。」と主張したため、彼をヘロデ大王が作った要塞マカエラスに幽閉しました。そしてヘロディアはヨハネを恨み、殺したいと思っていましたが、娘が宴会の時に踊り、ヘロデが「ほしいものを与えよう。」と約束したので、娘は母に言いつけられて「ヨハネの首」と言いました。それでヨハネを斬首しました。そして、イエス様がガリラヤ地方で活動しておられると、その話がヘロデの耳にも入り、ヨハネがよみがえったのではないかという噂が流れるほどでした。それで、「このイエスは何者か、とイエスに会ってみようと思っていた」とルカ9章9節に書いてあります。

しかし、彼のその興味は、ちょうどバプテスマのヨハネに対して向けられたのと同じように、興味はあるのですが、自分の悪事が暴かれると当惑する、また脅威を抱くというものでした。イエス様がガリラヤ湖畔で人々の人気が集まった時に、ヘロデがあなたを殺そうとしているとパリサイ人がイエス様に伝えたことがあります。それに対してイエス様は、「13:32 行って、あの狐にこう言いなさい。」と言われました。

8 ヘロデはイエスを見ると、非常に喜んだ。イエスのことを聞いていて、ずっと前から会いたいと思  
い、またイエスが行うしるしを何か見たいと望んでいたからである。9 それで、いろいろと質問した  
が、イエスは何もお答えにならなかった。10 祭司長たちと律法学者たちはその場において、イエス  
を激しく訴えていた。11 ヘロデもまた、自分の兵士たちと一緒にイエスを侮辱したり、からかったり  
してから、はでな衣を着せてピラトに送り返した。

ヘロデは、イエスには強い興味がありました。その行なう大きな奇跡に彼は非常な関心を示し  
ていました。しかし、その興味に対してのイエス様の反応は、「何も答えない」であります。まるで魔  
法使いか手品であるかのように奇跡を行われることは、イエス様は一切なされないからです。そ  
れで、「マタ7:6 真珠を豚の前に投げはけません。」と言われたように、口を開かれなかったの  
です。そしてこれは、主ご自身が弟子たちに語られたように、預言者の言葉を実現するためでもあ  
りました。「イザ 53:7 彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。屠り場に引かれて行く  
羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」

12 この日、ヘロデとピラトは親しくなった。それまでは互いに敵対していたのである。

このようなところに、人間の罪深さが露わにされています。互いに敵対していたところに、イエス  
様を巡って仲良くなっています。どのような政治状況であったのか正確には分かりませんが、ピラ  
トはローマによってユダヤ人の統治を任されているヘロデを立てることができ、すでにそこにあっ  
た政治的緊張状態が、この時だけ溶けたものと思われます。

実は、イエスを敵にすることで一つになった敵同士の者たちは、すでに出て来ています。10 節、  
祭司長と律法学者たちです。祭司長たちはサドカイ派で、律法学者たちはパリサイ派でありました。  
彼らは聖書の捉え方についてまるで違う見方をしている、互いに確執がありました。しかし、イエス  
を訴えるということについては、一致していたのです。律法学者は、イエス様から何度となく、自分  
たちの解釈について難癖を付けられ、安息日の解釈が大きなものでした。それから彼らのしてい  
ることもイエス様は非難しました。祭司長たちは、イエス様が神殿に入られると宮清めを行われま  
した。両者とも、イエス様を憎んでいたのです、それで、イエスの事で一致したのです。どこかで耳  
にしませんか？誰かのことが気に食わなくて、その悪口や苦々しい思いで一致して、それをことも  
あろうに、「交わりをしている」と言います。

人間の本質として、イエス様ご自身に敵対することによって一つになっていきます。キリストの  
前では自分の罪が炙り出されます。ですから、へりくだらないで、心を頑なにすれば、その頑なさ  
において一致するのです。使徒の働きでは、詩篇第二篇がこの出来事を指しているものとして祈  
っています。「使徒 4:25-28 あなたは聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの父であるダビデ  
の口を通して、こう言われました。『なぜ、異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの国民はむなしいこと  
を企むのか。地の王たちは立ち構え、君主たちは相ともに集まるのか、主と、主に油注がれた者

に対して。『事実、ヘロデとポンティオ・ピラトは、異邦人たちやイスラエルの民とともに、あなたが油を注がれた、あなたの聖なるしもベイエスに逆らってこの都に集まり、あなたの御手とご計画によって、起こるように前もって定められていたことすべてを行いました。』

この詩篇では、主の再臨の前に、諸国は一つになって神とキリストに反抗するために軍隊を集めて、戦います。ハルマゲドンの戦いです。けれども初臨においても、このようにして異邦人たちが一つになって反抗したのです。

### 2C バラバとの引き換え 13-25

13 ピラトは、祭司長たちと議員たち、そして民衆を呼び集め、14 こう言った。「おまえたちはこの人を、民衆を惑わす者として私のところに連れて来た。私がおまえたちの前で取り調べたところ、おまえたちが訴えているような罪は何も見つからなかった。15 ヘロデも同様だった。私たちにこの人を送り返して来たのだから。見なさい。この人は死に値することを何もしていない。16 だから私は、むちで懲らしめたうえで釈放する。」

ピラトは、民衆の扇動者という告発を彼らはしていたけれども、イエスにはそのような罪はないと判決を下しました。さらに、ヘロデも嘲弄はしこそすれ、彼がイエスに罪を見出したという報告はありませんでした。それを利用して、ヘロデも罪を見付けることはできなかったと後付けしています。これは公の宣言であり、「見なさい。」という言葉にそれが現われています。これで最終判決です。

ところが、問題は「むちで懲らしめたうえで釈放する」と、無実であると宣言したのに、彼らのイエスに対する強い不満を宥めるために、むち打ちの懲らしめを与えることにしたのです。私たちの世界でしばしば起こらないでしょうか？「ガス抜き」です。感情的な鬱積があるので、全く間違っていないのに、その人が何らかの懲らしめが与えられたほうが良いとすることです。しかし、ピラトが、普段はそんなことをする人ではないのに、ここではいつもと違い、宥めようとしているところに、ピラト自身もこれまで気づかなかったところにある、さらに深い罪が明らかにされています。それは、「正しいと分かっているのに、それを行わない」という罪です。

しかし、ピラトのこの罪でさえ、すでに神の御手の中にありました。なぜなら、全ての人がイエスの前では罪人であることが明らかにされるためです。

(17節は欠けていますが、下の欄にあります。17さて、祭りのときにピラトは、彼らのために一人、釈放してやらなければならなかった。)18 しかし彼らは一斉に叫んだ。「その男を殺せ。バラバを釈放しろ。」19 バラバは、都に起こった暴動と人殺しのかどで、牢に入れられていた者であった。

ピラトは、まさに祭司長や指導者たちが告発していた扇動の罪を犯して収容されている男を連れて来ました。ここまで明らかな対比はありません。何もそのような罪に値することはしていないイ

エスと、まさにそのようなことをしているバラバであります。

20 ピラトはイエスを釈放しようと思って、再び彼らに呼びかけた。21 しかし彼らは、「十字架だ。十字架につけろ」と叫び続けた。22 ピラトは彼らに三度目に言った。「この人がどんな悪いことをしたというのか。彼には、死に値する罪が何も見つからなかった。だから私は、むちで懲らしめたいとて釈放する。」23 けれども、彼らはイエスを十字架につけるように、しつこく大声で要求し続けた。そして、その声がいよいよ強くなっていった。

恐ろしいことの瞬間が来ました。無罪である者を殺せという声がいよいよ強くなった、ということです。ピラトは三度、無罪の宣告をしました。しかし、いよいよ声が大きくなります。ここで使われている言葉は、まるで、だだをこねている子供たちのそれです。絶叫する、わめき散らすという意味です。これも、人間社会にありますね。真実から来る良心の声に対して、このようにわめき立てます。本来なら行なうべきことについて、それを行なわせないように、必死に抵抗し、聞きたくないと喚きます。そして、自分の願いを要求として突きつけて、押し通します。

24 それでピラトは、彼らの要求どおりにすることに決めた。25 すなわち、暴動と人殺しのかどで牢に入れられていた男を願いどおりに釈放し、他方イエスを彼らに引き渡して好きなようにさせた。

ここに、ピラトがどのような罪を犯しているのかをルカは明らかにしています。一つは、要求どおりにしたのです。人が訴えているとおりに、願っているとおりにさせてよいものでしょうか？いいえ、正義によって、公正によって支配されないといけません。ところが、なすがままにさせているのです。私たちが正しくないことを、愛という名で容認することはないのでしょうか？もう一つは、悪者が正しいとされ、正しい方が悪者と同じ仕打ちを受けるという逆を、ピラトが放任したのです。これも悪ですが、私たち人間社会でしばしば起こることです。

ですから、私たちが普段から目にする悪です。このような不条理と理不尽なことが、しばしば起こります。しかし、イエス様に対するこれらの悪は、彼らが普通の時にはしていなかったことばかりです。イエス様の前では、全ての人の深い部分での悪が露わにされます。そして、サタンが強く働いているので、その部分が一層のこと浮き彫りにされました。

しかし、そのことを神は敢えてご自分の計画の中で定めておられたのです。それは、「どの人も、自分自身が知っている以上に、罪深いのだ。」ということを明らかにするためです。私たちは、下に沈んでいる泥は、沈んでいるので、そういった物を普段は目にしません。しかし、何かがあって、書き回されると全体が泥になります。それと同じように、イエス様の前では人々の泥が明らかにされるのです。そのことをもって、イエス様は身代わりに死なれます。これらの悪が明らかにされた上で、私たちのために執り成して、罪を赦してくださいと祈られるのです。